詠む

毎日歌壇賞・毎日俳壇賞 2023年

伊藤 一彦 選

最優秀

兵の字の部首八頭（はちがしら） 揺れながら八つの頭丘駆け抜ける　群馬 山崎 杜人

優秀

木の中でほこほこねむる虫たちに薪（まき）割りという危険がせまる　津市 川原田明子

気がつけば今日は「はい」しか言ってない服も全身灰色だった　横浜市 砂月 七

ロシア軍のウクライナ侵攻は続き、今年さらにイスラエル軍はハマスとの対立からガザへの攻撃を行っている、悲惨なニュースの連続だ。そんな世界の今日を憂える投稿が多く寄せられた。では、日本の私たちは今何をしたらいいのかと問う歌も少なくなかった。若い人の投稿が増えたのはうれしかったが、生きづらさと不安を歌った作が印象に残った。

不穏な世界情勢の今、昨年12月に逝去した篠弘氏（毎日歌壇選者）を改めて思う。篠氏の最後の大著は『戦争と歌人たち』だった。ずしりと重たいこの一冊を私は読み直している。

米川千嘉子 選

最優秀

割り箸をレジで受け取りアンカーの非正規として光る扉へ　四日市市 早川 和博

優秀

床に入れば我を待ちわび霊魂（たましい）の近づき来るを一人知るなり　大阪市 森川 慶子

除草剤撒（ま）かれし草は枯れ果ててその手我をも枯らさむとせむ　三条市 高橋 実子

早川さんが受け取った弁当や割り箸はおそらくみな非正規で働く人々によって作られ配達されて来た。そんな非正規のリレーの最終走者として作者は走る。「光る扉」の外には何が待つのか。鋭い問題意識と表現の巧みさの底に痛みがある。亡くなった夫を思い続けた森川さんの作品も生々しい悲しみがあふれていて心打たれた。高橋さんは今年の大きなニュースを取り上げる。事件の根底にある人間社会の真っ当さの欠如は、多くの投稿歌が訴えるものでもあったと思う。それにあらがうように温かな人間の歌もあった。

加藤 治郎 選

最優秀

小さき手で小さきパンツをひき上げるおむつがとれて君は少年　東京 青木 公正

優秀

介護していたのか君は毎日を遺（ゆい）した短歌死後読んで知る　川西市 那須三千雄

エレベーター最初に入りあとに出るわたしの夢の草原の果て　東京 新井 将

揺れ動く世界の中で自分の心を守りたい。そう思うとき短歌がある。それは確かな器だ。歌に心を収めることができる。そしてその歌を多くの人々が読む。毎日歌壇は心が交流する場である。あらためてそう思う。青木さんは子どもが少年となる光景を歌った。小さな手の動きに生命の力を感じる。未来に向かうまばゆい姿だ。家族の愛があふれている。那須さんはのこされた短歌に妻の心を読んだ。献身的な介護を知ったのは自分が回復してからだった。新井さんは草原の果てのエレベーターという美しい心象風景を歌った。

水原 紫苑 選

最優秀

いつかこの手紙も副葬品として焼けるのですか夕陽（ゆうひ）の切手　千葉市 星野 珠青

優秀

心とはなんなのだらう剝（む）かれたる林檎（りんご）を誰も綺麗（きれい）と言はず　相模原市 髙田 祥聖

目を閉じて（ロシュ限界はもう既に壊されていて）口づけをした　京都市 よだ か

短歌という詩型においては、現代と古代、革新性と普遍性の双方向を往還しなければならないと思う。そしてまた、言葉それ自体の自律的な美しさが求められよう。

星野さんの一首は、あたかも作者自身が古代の女王であるかのような威厳に満ちていながら、現代を生きる人間の繊細な息吹を伝えている。

髙田さんの一首は、形而上（けいじじょう）的な問いをそのまま調べに乗せて、読者を打つ。

よだかさんの一首は、新しい言葉によって人が星でもあるような世界が生まれている。

投稿規定 はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。

※毎日歌壇賞・毎日俳壇賞の最優秀受賞者にはギフトカードを贈呈します。

こちらから投稿できます

おことわり 次回は1月8日に掲載します。